

6 言語聴覚学科の国家試験対策の現状

学院 言語聴覚学科 下嶋哲也 坂田善政 小野久里子 北義子

言語聴覚士国家試験は平成 11 年に開始され、当学科では平成 17 年に 5 名不合格者が出た。そのため、その翌年度から国家試験対策を学科として開始した。以来 12 年間、受験したすべての学生が国家試験に合格している（下図）。一方、対策の経過の中で、近年の学生には従前よりも丁寧な対応が求められるようになってきたと感じている。対策に求められる丁寧さとは、個別化である。この個別化を具体的にどのように行うのかについて、試行錯誤がはじまっている。

▼個別化課題(1)：個々の学生の試験に対する知識量の把握と学習方法の助言

学力を把握するためのアセスメントとして、当学科では演習問題と解答を作成し、演習問題の正答率を結果として調査している。学生が問題を作成することで、学生自身が知識を得ることができる。結果は、個別値とクラス平均を合わせてグラフにして個別配布し、その際に面談を行った。学習方法については、当学科は大卒課程であるため、学習方法は各自分かっている面もあるが、近年「問題と解答が先に提示されているものは学習の方法がわかるが、それらがわからないものはどうしてよいかわからない」と考える学生がみられる。これに対しては、「問題の作り方」を指導している。

▼個別化課題(2)：勉強時間のコントロール

学習内容ではなく、生活指導の部分にも支援が必要になっている。授業以外の時間を「課外」と考えすぎて学習に使うことをせず、自分に必要な学習を行う時間を自律的にとることが、思うよりも困難であることが個別面談等で分かってきた。

▼クラス運営上の課題：クラスのムード作りとクラス内の人間関係や居心地

学生のモチベーションは、数値では表しにくいもので支えられている。「全員で受かりたい」「全員で助け合ってがんばろう」といった、集団のもつダイナミクスを活用するには、学生の孤立を防ぐことが重要である。このために、定期的に設定されている個別面談や、それ以外の廊下の立ち話も軽視できない。

試行錯誤から得たノウハウはいくつかあるが、近年 S T 学科の志望者数は目減りしており、学生間の学力差は広がっている。中には、中学高校レベルの数学などにさかのぼる必要のある学生がいる。現在の 2 年制カリキュラムを継続するにあたり学科としての課題を報告する。

